

# しが国際協力親善大使レポート

おおたわら えいすけ  
大田原 英介さん

隊次：2015年度1次隊

職種：コミュニティ開発

派遣国：パラグアイ

## プロフィール

大学では環境問題について主に統計学・経済学を通して学びました。大学を1年休学しバックパックでヨーロッパ、中東、アジアを旅しました。日用品メーカーに就職し営業を4年間行い、現在青年海外協力隊としてパラグアイで小規模起業家支援 NGO でボランティア活動しています。

## 地域の気候や文化の紹介

私の派遣地はパラグアイのグアイラ県の県庁所在地ビジャリカ市です。県の人口は20万人程で、そのうちビジャリカ市は約7万人程です。気候は日本と真逆で8月頃が真冬で、2月頃が真夏となります。冬といっても雪は降らず、パラグアイの人の多くは雪を生で見たことがないようです。宗教はキリスト教カトリックの人が大半です。生活の中で家族や地域の友人とのつながりを大切にしている人が多いと感じます。ビジャリカ市はパラグアイの伝統楽器アルパが有名な地域です。

## 活動や生活について

NGO主催の事業計画コンテストがありました。そこで関わっている現地の起業家の方々から、自らの習慣や価値観を広げることの難しさや、“実行”していくことの大切さを学んでいます。

活動は現地 NGO 企業インキュベーション“LANSOL（ランソル）”で小規模起業家や地方生産者の所得向上に向けた経営支援を行っています。活動の一つとして2015年12月に行った事業計画コンテストでは、起業家が作成した事業計画の数字の確認や計画概要について話し合いながら修正などを行っていました。起業家の大半は経営や事業計画などの知識が無く、さらにはエクセルやパワーポイントも使い慣れていませんでした。その中で、私が伝えたかったことは、お客さんを中心に考えるということでした。パラグアイで生活する中で感じていたことは、「お店側の都合」や、「できる範囲」のサービスしかないという感覚でした。起業家と話しをする中で、お客を主語として話すことを心がけましたが、実際は事業計画の形を作ることが精一杯でした。しかし、自動車の修理工場を計画していた起業家と話している中で、「現在お客さんはバイクを修理したい時に、修理できる工場へ行かなければ

いけない。だから自分たちは、一カ所で全て修理できる工場をつくる。」という起業家がありました。起業家は事業計画という新たなことに挑戦しており、これから実際に事業を運営しお客さんと接していきます。「もっとこうしたらいいのにな」という私の考えや価値観からみた不足にとらわれず、私自身もパラグアイの起業家が考えているアイデアを知り、理解し、またそれを実現していくために日本的な方法だけでなく、パラグアイの方法や価値観を学んでいく必要があると改めて感じました。

また、パラグアイの人々と話していて、「こうしたらもっと良くなる」というようなアイデアを聞くことができます。しかし、続けて「だけど“実行”が不足しているんだ」という声を聞きます。これは、日本で生活していて私自身や多くの日本人にも共通している課題だと思います。しかし、活動している NGO のスタッフ、また所属する起業家の方々はまさに今、自分たちの人生をより良くしていくため、社会をより良くするために動いています。起業家の中には 18 歳の女性もいます。知識や経験が有るか無いかということや、失敗したらどうしようという不安や、できない理由探しより、“実行”していくことが大切だと現地の方々から学んでいます。



パラグアイの生活の質向上のために日々議論。

# しが国際協力親善大使レポート

おおたわら えいすけ  
大田原 英介さん

隊次：2015年度1次隊

職種：コミュニティ開発

派遣国：パラグアイ

## 活動や生活について

私は、パラグアイで小規模事業者や地方生産者への起業・経営支援を行っている NGO の支援活動を行っています。私の仕事は、大工や鉄工職人さんへの生産効率の改善知識の普及や、数字による経営管理の習慣が無い起業家さんへの経営管理補助、地方生産者の農産物などの販売支援を目的とした新たな市場の開設を試みています。私は、ビジネスを通じて途上国開発を行いたいという想いから現在の活動内容を選択しました。

私は、中学生の頃、はじめ環境問題に興味を持ち始めました。それは、実家が琵琶湖から徒歩1分で小さな頃からずっと美しい琵琶湖や比叡山系を感じて育ったことが影響しています。環境問題を学ぶにつれ経済的な貧困や先進国と途上国の格差も環境問題と大きく関連する世界的な問題なのだと認識するようになりました。大学では環境経済学を学び、在学中に1年間休学をしヨーロッパ、アフリカ、中東、アジアと旅をしました。アフリカ滞在中には、JICA セネガル事務所や国連事務所ヘインタビューしたり、現地で偶然知り合った青年海外協力隊員の方の活動を見学させていただきました。旅行ではできる限りそこに住む人々と同じモノを食べ、同じように移動し、生活を感じることを心がけました。その中で感じた、途上国と言われる人々の生きる力強さや不公正な社会環境の経験が、私へ途上国で働くことへの関心をより一層強いものにしました。JICA ボランティアになる前は、日用品メーカーの営業を行いました。それは、海外に出る前に日本社会や民間企業で働くという経験も意味のあるものだと感じたからです。結果的に、働くことの厳しさや経済的な利益意識の大切さを学びボランティアへ臨むことができます。

私の活動する NGO はビジャリカ市という人口約7万人程の県庁が存在する小中規模都市に位置します。市内にあるお店や作業場の大半は家族で経営しているような商店がほとんどです。そのような人々の大半は、日本人のように貯金をする習慣がありません。日本人の私からすると、それは将来への不安ではないかと思うのですが、パラグアイの多くの人々は、将来よりも「今」や家族や友人の助け合いを大切にしているように感じています。

活動1年目、私は大工と鉄工の職人さんや職業訓練校への生産効率改善および経営管理の講習などを始めました。大工と鉄工の職人さんの作業場は、いつ見ても木材や鉄くずなどが散らばっており作業効率の点ではもちろん作業環境としても危険があると感じていました。目に見える作業環境の改善と合わせてそれらの改善が経営改善につながる必要がある

と考へ数字による売上げや経費管理を併せて試みました。講習会などを毎週開催しながら目標設定や理想的な環境などを見える化して作業場で展示するようにしました。職人達自身でチェックしていく方法ができたところで私は、直接的に支援することをやめ職人の方々へ完全に任せることにしました。1か月程経過するとそれまである程度清潔に保たれていた作業環境は依然のように汚れた状態へと戻り、経営管理も続けることができませんでした。現地の人々に主体的に実行してってもらうことの難しさを感じました。一方で、職人の方々がどのような状態が良くて、どのような状態が悪いのかということを生産効率や作業環境の安全性から考えることができるようになっており目指す状態をすぐ共有できるようになったことは一つの成果でした。また、現地の方々との接し方についても単純に教えるという感覚ではなく、現場で働く人々と一緒にやってみることが大切だと感じています。

その中で、一緒に活動していると一般的に正しいと認識していたことも現地の人々の価値観からするとそれが必ずしも人々が望むものではないのではと考へさせられることがあります。例えば、「働く」ということについてです。働くことはもちろん必要なことですが、パラグアイでは度々、家族との時間や心を穏やかに保つためのリラックスする時間を犠牲にしてまで必要以上に働かないというような話や、働き方についても休憩を度々取りながらマイペースで働いている風景を見ます。効率性や利益を追求していくことは経済的には正しいことかもしれませんが、人との繋がりやマイペースを大切にしながら人にやさしく生きているパラグアイの人々の生活は幸せと呼べるかもしれません。



大工さん工場にて生産効率の講座・実習後に撮影